

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
古文書班
2005.12
第5号

『宇都宮孟綱日記』第1巻 ついに出版へ

古文書ファン皆様に朗報！

秋田県公文書館で現在翻刻作業を進めている『宇都宮孟綱日記』第一巻が、ついにお求め可能に！

昨年で刊行を終了した『渋江和光日記』と見くらべることで、江戸時代の秋田がより一層魅力あるものに…

『渋江和光日記』の最終は天保十年（一八三九）、一方『宇都宮孟綱日記』の始まりは天保十二年。従って、二つの日記にまたがって登場する人物もいるわけで、今回の『古文書倶楽部』では、渋江和光の息子、貞治に注目します。

『渋江和光日記』では…

実は養子の和光、義理の母「かかさま」にはまったく頭が上がらない。天保三年十二月二十三日の日記には「貞治も前髪迄取候て、是迄之様奥へ指置候ては不宣候」とあり、十六歳で元服するまで貞治は奥の「かかさま」のもとで暮らしていたことがわかります。

しかし和光は「かかさま」の教育方針に、決して納得していなかったのです。
(天保三年九月三日条)

貞治義今年は十六歳二相成候得共、手紙等

認したためかね兼候躰。素読御試之年齡二候得共、
今いま以も相あ濟すし不も申う…

満足に手紙も書けない息子、学館に入る年齢なのに、それすらも覚束ない息子。元服を終えた貞治に、武士としての教養を注ぎ込もうとする和光。果たして息子は父の思い通りに教育できたのでしょうか？

『宇都宮孟綱日記』では…

天保十四年（一八四三）十一月十一日、江戸藩邸にいた家老宇都宮孟綱に、国元から飛脚便が届きます。

須田内記 渋江貞治 梅津小太郎、先月廿八日御相手番被仰付候旨申来候。

ここで渋江貞治が御相手番に就任した記事が見えます。当然その後、貞治は関係各方面に挨拶をするわけでして、十二月四日に宇都宮孟綱にも披露状と礼状が届きます。ところが…

昨夜御飛脚ニ、渋江貞治より御相手番被仰付候御礼披露状相達候所、同職中への文体二無之、且御礼状も相達候処、是又失礼之文法難其意次第二候。

とあり、「披露状・御礼状ともに文体も文法も全くなっていない」と宇都宮孟綱は渋江貞治に激怒しております。

果たして、お父さん渋江和光の息子への教育の思いは、全く生かされていないのでした。
残念！
(伊藤成孝・畑中康博)

『宇都宮孟綱日記』第一巻の刊行は平成十八年三月の予定。
価格は五千円。詳しくは秋田活版印刷株式会社（電話 0181-88813500）
におたずねください。

お知らせ

秋田県公文書館ミ二展示

場所：当館2階 特別展示室

日本六十余州国々切絵図の世界 後期 日程表

第1クール 12月6日(火)～12月22日(木)の15日間

出羽国・陸奥国・丹波国・丹後国・但馬国・播磨国・備後国・石見国・出雲国・伯耆国・因幡国・安芸国・隠岐国
(年末年始休みと展示替え期間12月23日～1月10日)

第2クール 1月11日(水)～1月27日(金)の15日間

出羽国・陸奥国・美作国・備前国・備中国・備前国(別)・讃岐国・阿波国・伊予国・土佐国・淡路国・対馬国
(展示替え期間1月28日～1月31日)

第3クール 2月1日(水)～2月17日(金)の15日間

出羽国・陸奥国・周防国・長門国・筑前国・筑後国・肥前国・肥後国・豊前国・豊後国・日向国・大隈国・薩摩国・壱岐国

古文書こぼれ話

「文化ショック」

柴田次雄

「ア、ホントカ?」、オランダ婦人は驚いて商館の奥の間去りました。

時は幕末の元治二年(一八六五)、秋田藩家老宇都宮孟綱ら一行が欧米諸国との貿易で賑わう横浜開港場を視察したときのことです。オランダ商館を訪ねた折り、好奇心のあまりあるいは彼らの親切な応対に甘えたか「異人」の「婦人」を見たいと話してみました。しばらくして、「房」中「奥の間」から「婦人」が姿をあらわしました。

「着物八下二鉄炮袖ヲ着、上二日地赤」く模様をついた「麻縮ミノ様ナル」ものを着ていました。それから「袴ノ様ナル広キ物」(スカート?)をつけていました。得たりと秋田の武士の一人が「その袴ノ様ナルものヲ、サクリ探り?」見「た」と「右婦人、日本、ア、ホントカ?」と、奥の間へ去った、といっわけです。話はこれで終わりません。ほどなく、「御覽ニ入レル」と「婦人」が「袴ノ様

ナルものヲ」手に再びあらわれました。よく見ると、「鯨」(鯨ひげ)で輪をつくり「ソレヲ赤キ絹ニテ巻キ、日本ノ提灯袋ノ様ニ輪ヲ、上ハ小サク、段々下ハキク致シ、豎ハ糸ニテアミ、豊むニよろしく、ソレヲ下ニアテ」上ニ右 袴ノ様ナル物ヲ懸」といつ仕掛けでした。「婦人」が「ヲカミサン」にかいだったので、何のことが通詞に聞いてみたら、「ヲカミサン」持って行キヤレ」とのことでありました。(欧米諸国の商館の人々は)「一体、日本人ヲナツカシク思ふ容」子」であったといひます。

以上の記事は、このとき随行した岡 百八(御膳番役、百八十六石余)の「公私日記」の一節です。秋田藩士一行は、婦人のドレスの仕掛けに好奇心を募らせたのであつて、現代の軽犯罪事件とは趣が違つことをお忘れなく、念のため。

【編集後記】 雪の降る季節となりました。十二月から再びミ二展示が開催されております。後期の今回は、海運を通じて秋田との関係の深い、西日本の絵図が中心となっております。どうぞお立ち寄りください。

(内藤)